



J・W・トレントJr.著

『精神薄弱』の誕生と変貌』を読む

津守 真

二十世紀後半、障害をもつ人々の福祉は世界的に変貌しつつある。私の周囲でも、障碍の子どもをもつ若い親たちは、わが子の将来についてこれまでの型にはまったのとは違う在り方を模索し、新しい教育と福祉を作り上げようとしている。そのような時期に、この書物の翻訳が出版されたことは、障碍の意味を問い直すチャンスである。上下二巻の大部の書物であり、私なりの主観的観点から選択して紹介したい（『精神薄弱』の誕生と変貌―アメリカにおける精神遅滞の歴史―上・下』J・W・トレントJr.著、清水貞夫・茂木俊彦・中村満紀男監訳、学苑社、一九九七）。



障害は社会的に構成された観念である

精神遅滞は、科学という名のもとに、ケアの提供という名のもとに、社会的コントロールという名のもとに正当化されて来た（上巻 p. 10より）

原著の題名は、*Inventing the Feeblemind: A History of Mental Retardation in the United States*である。「精神薄弱」という語は社会が作り出した構成物であると言ひ、その概念が作り上げられるに至った米国の歴史を豊富な資料を駆使して追っている。著者はこの書物の学問的立場について、「知と社会の歴史を結合させる方法を取りながら、理論的枠組みとしては社会的構成主義と批判社会学の双方」をもとにしたと述べている。子どもの概念は近代の発明であると言ったアリエスの『子どもの誕生』を思い起こさせる。この著者は、「精神薄弱」という概念は「精神遅滞を社会的にコントロールする人達」が作り出したものであると言ひ、

「権力をもつ人々」は、障害をもつ人々をあるときは哀れみ、あるときは恐れ、その人々に隔離した教育と福祉を強制した。「社会の中枢にいる者とそのご用人たちは、自らの専門家としての立場及び当時の政治、社会の現実から判断される合理的な対応を考案し、……：自らが参画しながらコントロールしようとした。彼らは人道主義と科学的精神を結合させて、熟知しているかぎりの最善のケアを人々に提供しようとした」。つまり、人々は、自分たちの生活を守るために、障害をもつ人を排除し、その



上でその人々を保護し管理した。この書物は「そうした構成とまなざしによって生活を変えることを余儀なくされた人々の生の声」（上序章）に耳を傾けつつ福祉の歴史をあとづけようとしている。

施設内適応への道

社会の中よりも、施設内で品行方正な凡庸になることへと変わっていった（上巻 p. 107 より）

十九世紀後半、白痴教育の使徒と言われたセガン（一八一二—一八八〇）が教育の目標としたことは自立だった。それは一般市民とのかかわりの中でなされるとセガンは考え、そのための教育技術を考案した。しかし、「南北戦争以後、米国社会は産業化が急激に進み、教育訓練を受けた障害者にも居場所がなくなっていた。実際彼等の存在は、社会秩序や生産秩序を阻害するものと見られたのであった。……そして、実際社会の中よりも、施設内で品行方正な凡庸になることへと変わっていった」（上 p. 107）。つまり、施設の中でおとなしい良い子になるという施設病の端緒をもなしたのであった。「セガンは、教育技術の問題に心を奪われ過ぎたため、施設の大規模化をくい止めることができなかった。……南北戦争後、教育によって白痴児を生産人として得ると唱導した人達に、生産人を目指さない恒久保護主義を招来するきっかけを与えてしまった。このような目的の方法と手段への還元は、精神遅滞の歴史において際



立った現象でありつづけた」（上 p. 11）と著者は言う。一九二〇年以降、専門家たちは、障害をもつ人たちを施設社会に適応させるのがこの人たちにとって幸せな道であると考えようになった。（下第6章）そして、隔離された施設の数は増加し、規模は拡張していった。

施設管理者の危機

まもなく彼らは特別な教育機関を保護收容の安息所へと変貌させはじめた。……それは手のかかる厄介者たちを施設という一つの敷地内に保護收容するという

ものであった（下巻 p. 63より）

社会と家庭の重荷となる人たちを、家庭やコミュニティから隔離された学校で面倒をみることは、人々から喜ばれる事業であった。そして私的なし公的な資金援助を受ける施設長たちは、「その当初から、より専門化された機能を果たすために、建物を増やさなければならぬと考えていた」。「より多くの土地をもつことは、より多くの建物をつくらなければならないことを意味していた。……より多くの生徒がいるということは、当然、それらを管理するために、教師ではない管理職が必要となる。……最終的には、学校が一つの機関としての多様性を増すようになると、白痴児の教育そのものは、他の者たちに任せっぱなしになっていく」（下 p. 63）。「施設長は単なる管理者となり、教育上のニーズよりも施設を効率的に運営することの方に意を注



ぐようになるのである」(上 p. 152)。この点で著者の目は厳しい。福祉も教育も、人間にかかわる仕事だから、対象になる人々が自分らしく生きることに目を注いでいるかどうか問われている。施設の拡張の方に重点が移ったら順逆転倒である。管理者だれでもおかれる危機である。著者はこのことに頁を費やす。

本書の後半では、施設内部の実態が描写される。一九四〇年以後、第二次世界大戦中、良心的兵役拒否者が軍隊にゆくかわりに施設で働くことを要求された。それは施設の内情をひろく世間に知らせる機会となり、脱施設化の一助となった(下第7章)。一九六八年に至るまで米国の施設は増加を続けた。一九八〇年代より、施設は次々に閉鎖され、あと数年で米国の居住型施設はほとんどすべて閉鎖される。

障害を見る人の眼

終章「愚か者を喜んで忍ぶことについて」(下巻 p. 231)より

この書物は、出来事としての歴史にとどまらず、それぞれの時代を生きていた人の内面の歴史にふれる。著者がこの書物を書いたのは、「この問題と深いかわりをもつ我々自身に対してであり、それによって、反省が促されることを願うからである」と言う。この反省が障害をもつ人たちが蒙っている苦痛と屈辱への感受性を鋭くし、人間としての連帯を生む。もしこの感受性があるならば「我々自身がいかなるものであったかの歴史を書き残さなければならない」(上 p. 17)と著者はいう。福祉の歴



史は、私たち自身が障害を見る眼の歴史である。

著者は、地域福祉か施設福祉かという現代の問いに欠けているものがあると言う。「それは、生産性、利潤、充満する欲望との関係で、意味と価値をことごとく定義し限定しようとする社会では、どのような場所においても知的障害者は搾取されるに違いないということである」。その搾取はだれもとどめることはできないほど、人間に付着している。施設であろうと、作業所であろうと、生産能力によって人間の価値が決まるのではない世界が作られたときに、障害をもつ人たちも市民として社会に参加することができるようになるだろう。「いずれも我々を取り巻く世界の鏡である。……入所施設への回帰は、いかなる障害者にとっても利にならない」。未来について言うならば、知的障害者にのみまなざしを据えるのではなく、この歴史を通して知るように、社会的構成物としての障害の意味を問わなければならない。その場合、障害をもつひとりひとりの人の姿が見えなくなったときには、危険信号である。「未来においては、精神遅滞の問題は、我々自身の問題であり、それは不安を伴いながらも大いなる約束を予感させてくれる」(下P. 243―244)と著者はこの大部の著作を結ぶ。この歴史に示されるように、障害をもつ人の福祉は四十年前とは非常に違ったものになっている。私共自身が障害を見る眼を変えてゆくことができるならば、未来において私共の社会は真の意味で人間的なものへと高められるだろう。そのことを信じたい。



障害という語について

この書物の紹介で、私は原著で用いられているままに「白痴」「精神薄弱」「精神遅滞」等の語を使った。著者は、そのような不快（差別）語を「あえて使ったのは、当時その言葉を用いた人々の感性を伝え、精神遅滞に対して付与された意味をより鮮明にするために他ならない」（上P. 14）と言う。日本語でも、その呼び名については幾つもの変遷を経てきた。私は従来「障害」という語を用いてきたが、この人たちは何も害毒を流していないのに「害」という語を使うのは失礼ではないかと気が付いてから、「障碍」という語を使うようになった。「碍」の字は自分の中につまづく石があるという語感である。私共の眼からその石を取り除けば障碍はなくなる。

この文章を書いている八月の末、毎年この月がそうであるように、私は戦争が終わったときのことを思った。夾竹桃の赤、カンナの赤を見ながら、もう兵隊にゆくこともない解放感を深く味わっていた。それから半世紀、私は幼児教育の歴史と障碍の歴史とが同時に進行している中を歩むこととなった。